

「再びガリラヤへ」

マタイによる福音書 28 章 1-10 節

最初にイエス・キリストの復活を知らされたのは、数人の婦人たちでした。彼女たちは、安息日が明けた日曜日の朝早く、待ちかねたようにイエスさまが葬られた墓に行きました。そこに現れた天使は、彼女たちにこう告げます。「恐れることはない。十字架につけられたイエスを捜しているのだろうが、あの方は、ここにはおられない。」そう言って、彼女たちに空の墓を見せたのです。

石がわきへ転がされたのは、復活されたイエスさまを墓から出すためではありません。そうではなく、復活されたイエスさまがすでに墓にいないことを彼女たちに、また弟子たちに見せるためでした。そうして彼女たちは、死んで葬られたイエスさまが、もう墓の中にはおられないことを知らされたのです。

その婦人たちに天使は、弟子たちに伝えるべき言葉を託します。「急いで行って弟子たちにこう告げなさい。『あの方は死者の中から復活された。そして、あなたがたより先にガリラヤに行かれる。そこでお目にかかれる。』」

イエスさまには生活を共にした十二人の弟子たちがいました。しかし、彼らの中で、ユダはイエスさまを裏切り絶望の内に自殺してしまいました。ペトロはイエスさまのことを三度否定しました。その他の弟子たちも皆、イエスさまを見捨てて逃げ去ってしまいました。イエスさまの十字架の死と埋葬を見届けたのは、その彼らではなく婦人たちでした。つまり、今や主イエスの弟子などと言える人は、どこにもいないのです。けれども、天使は「弟子たちに」と言います。ここを直訳するなら「彼の弟子たち」となっています。つまりイエスさまの弟子たちと強調して言われているのです。神さまは、なおも彼らをイエス・キリストの弟子と呼んでくださる。そこに、弟子たちに告げられるべき喜ばしい知らせ、罪の赦しの宣言があります。

弟子たちにとってガリラヤとは、故郷であり、彼らがイエスさまと出会い、弟子になった所です。つまり彼らの信仰の原点です。復活されたイエス・キリストがそこで彼らと再び出会ってくださる。彼らをキリストの弟子として、信仰者としてもう一度原点に戻って立て直してくださるのです。また、そのガリラヤへ復活されたイエスさまが弟子たちよりも先に行かれているということにも、大きな恵みが示されています。弟子たちは、ガリラヤからイエスさまに従ってエルサレムまで来ました。しかし、そこでイエスさまに従い通すことができずに挫折してしまったのです。信仰者として歩み出したけれども、その歩みを全うすることができなかつたのです。そんな彼らが、逃げ帰っていく先がガリラヤです。

けれども、そのガリラヤに復活されたイエスさまが先に行って、彼らを待っていて迎えてくださる。そのイエスさまによって彼らは再び弟子として、信仰者として立てられるのです。それは、もはや自分の力や信仰心によってではありません。イエスさまにどこまでも従っていくという彼らの決意や自負はもう打ち砕かれたのです。そういう人間の思いや力ではなく、私たちの弱さや罪の全てを背負って十字架にかかって死んでくださった主イエスによって、また、その主イエスを復活させた父なる神さまの恵みによって、私たちはキリストの弟子として、信仰者として立つことができるのです。

さらに、弟子たちへの招きは、天使だけではなく復活されたイエスさまご自身も、婦人たちに弟子たちへの言葉を伝えます。「恐れることはない。行って、わたしの兄弟たちにガリラヤへ行くように言いなさい。そこでわたしに会うことになる。」

イエスさまが語られたこの言葉は、天使が告げたものとほぼ同じです。しかし一つだけ大きな違いがあります。それはイエスさまが弟子たちのことを「わたしの兄弟たち」と呼んでいることです。天使は「彼の弟子たち」と言っていました。そこにも、つまり裏切った弟子たちを、神さまがなおも主イエスの弟子と呼んでくださっている恵みが示されていました。しかし、イエスさまは、さらに彼らを「わたしの兄弟たち」と呼んでくださるのです。そしてそれは、私たちに対しても与えられている呼びかけです。私たちも、あの弟子たちと同じようにイエスさまを裏切り、信仰において挫折し、とうてい弟子と呼ばれることなどできない者です。いやむしろ、イエスさまを十字架につけて苦しめ、「それでも神の子か」とあざける者たちの一人かもしれません。けれども、そんな私たちをイエスさまは、「わたしの兄弟」と呼んでくださるのです。私たちに赦しを与えて、神の家族に招き入れてくださるのです。

私たちは、この神さまの愛の中に飛び込んで行くものでありたいと願います。